

2001年4月25日『紀要』第33号合評会報告
成瀬武史「福音と問いかける心の対話
—神谷美恵子に学ぶ—」

手塚 奈々子

神谷美恵子は生涯を通じて「価値ある人生」の意味・理由を求める人であった。彼女は「クリスチャンは他の人々をうんざりさせる、自分達だけが関心を持つことを話している連中なのではないか？」という挑戦的な問いを投げかける。キリスト教は果たして今日の人々と対話し得るのだろうか？成瀬氏は神谷の書き物に基づいて彼女の生涯を振り返り、彼女をキリスト教から遠ざけた状況を探る。成瀬氏によれば、神谷は永遠の「汝」を祈りと観照で常に意識していた人間である。成瀬氏の目的は、神谷が「何故」「どのように」クリスチャンの対話恐怖症

に憤慨しているのかを明らかにし、また、神谷が霊的無気力に落ちるのを防いだのは同時代の書物また古典との接触であったということ論じる点にある。結論として成瀬氏は、神谷美恵子が「キリスト教の福音は今日の人々とも対話が可能でありその広さがある」という事実を示す逆説的な警告・反面教師であるということを示す。

合評会では、神谷美恵子の生涯を通して特に成瀬氏が主張しているクリスチャンの閉鎖性について議論が集中した。特に成瀬氏の論文から、「一般の人々に反発を呼ぶクリスチャンの言葉使いの根底には、他者への配慮の欠如が潜んでいる。」「対話する相手が考えを刺激され、やがて自分の手に負えないことを問いかけ始めるかもしれないという不安を先取りしているから（自分を守る）。」「危険を避けるには、天国の鍵は自家薬籠中の神学用語で覆い隠しておくにしくはない。しかしそれはパリサイ主義の独善以外のなにもものでもない。」「対話を求める心への気遣いは、人間への関心と人間性への洞察から始まる。人は自分の中にある人間の実相に真剣に向き合う時、初めて福音が『ものを言い出す』のを聞く。それには聖書の内側だけを指差すのではなく、空の鳥、野の花の麗しさを説明する人間の言葉も書かせない。」「それに至る道を彼女（神谷）の心に開示したのはキリストの中の神に他ならなかったと推測せざるを得ないだろう。」「キリスト者がたいくつを寄せつけないためには、求める者への心遣いと日常の言葉による対話が不可欠である。それらを通してのみ生きがいの根拠となる福音はその意味を生き生きと開示するはずである。」

以上の成瀬氏の見解から、合評会では社会に対するクリスチャンの閉鎖的な在り方が再意識された。また、評者がカトリックで洗礼を受けたクリスチャンであることもあり、カトリ

ックとプロテスタントの世界観の違いについても広く議論された。成瀬氏の論文からの以上の問題提起は、今日の具体的なキリスト教活動にも示唆を与えるものである。宗派を問わずキリスト者は普遍的な福音宣教を目指したイエスと使徒たちに倣い、自分たちだけに通じる狭い枠を突破し、常に他者との対話の姿勢を持たなければならないということ再認識させてくれた有意義なものであった。

（てづか ななこ 所員・社会学部助教授）

